

石神遺跡第8次調査現地説明会資料

山岸 常人

奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1988年11月19日

はじめに

石神遺跡の「石神」は飛鳥寺旧寺域の西北に接した当地域の小字名に由来する。1902年（明治35年）に噴水施設と考えられる須弥山石・石人像が発見されて以来、この遺跡は斉明朝の饗宴の場あるいは天武朝の飛鳥淨御原宮にあてられてきたが、発掘開始当初には範囲も性格も不確実であったため地名を冠して遺跡名としたのである。当調査部では1981年以来、石神遺跡の発掘調査を継続的に実施してきた。過去七回の調査を通して、須弥山石の転落位置を確認するとともに、多くの建物・井戸・石敷・溝などを検出している。これらの遺構と遺物によって、石神遺跡は南接する水落遺跡とともに、7世紀中葉から後半にかけて継起した重要な遺跡であると考え得るに至ったが、全容の解明にはまだ月日が必要である。

調査の概要

石神遺跡第8次調査は7月25日に開始した。第7次調査区の北に接する水田を対象とし、調査面積は約1,450㎡である。この地の地形は東が高く西へ向かって緩やかに傾斜しており、東端部では地山面が遺構検出面であるが、西へゆくにしたがって何層にもわたる整地土があり、後世の攪乱も加わり、極めて複雑な様相を呈している。

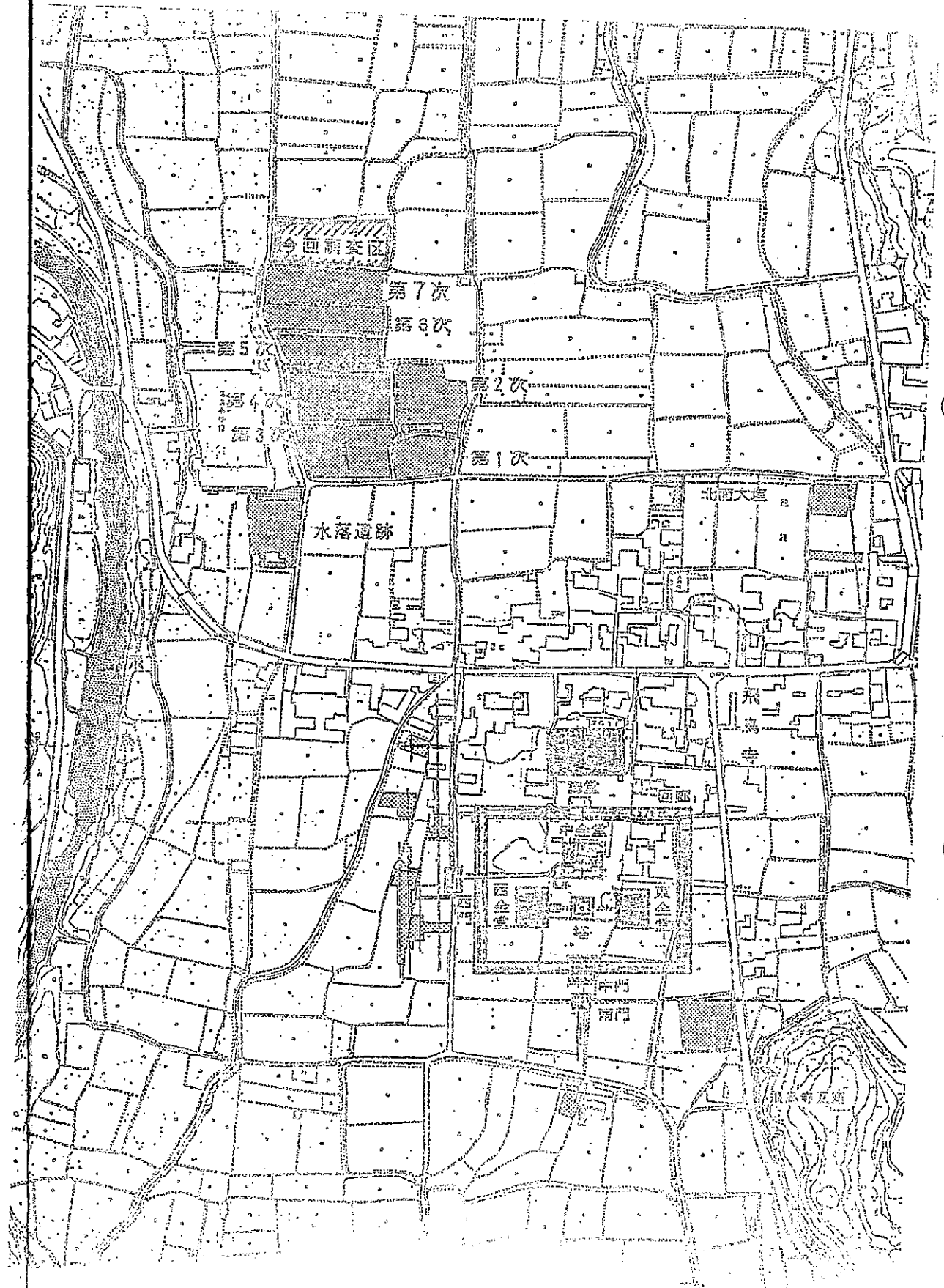
今回の第8次調査で南北145mに達し、調査総面積は約9,250㎡となった。その結果、石神遺跡はさらに北方へと展開する一方、西方にも廊状建物で囲んだ大きな区画が存在すること、今回調査区の半ばで南から続く区画が一応完結することが判明した。

遺構

検出した遺構は7世紀前半から中世までの時期のものである。主な遺構は7世紀中葉から8世紀初頭に属し、遺構の重複関係や造営方位の違い、柱穴の掘り込み面や内部の状況、出土遺物などから、大きく四時期に分けられる。A期（7世紀中頃：斉明朝）、B期（7世紀後半：天武朝）、C期（7世紀末：藤原宮期直前）、D期（7世紀末～8世紀初頭：藤原宮期）である。この区分は今回も変更しない。

A期 A期の遺構は、第4次調査区で見つかった大規模な石敷を巡らした井戸SE800から北へのびる石組溝の変遷などを手がかりとして、A-1期、A-2期、A-3期の三小期に細分できる。

A-1期の遺構は石組の暗渠が1条あるのみ。それも調査区中央やや西北寄りのところを斜行する溝07および03の底でごく一部を検出しただけである。



A-2期の遺構としては石組溝02と東西棟建物22およびその周囲の石敷などがある。石組溝02は井戸SE800に発して調査区中央を横断する溝で、A-3期には西方の石組溝03に付け替わるため、南半は壊されている。この溝を中心に左右に振り分けた形で建物22が建つ。桁行5間×梁間2間で、大型の掘形を持ち、柱はすべて抜き取られている。周囲には石列で見切った外側に石敷24・25が広がる。石列内は基壇状に高まっていたものと思われる。建物22の東妻に柱筋をそろえ北側に南北棟建物23が建つ。今回はその南半部を検出した。

A-3期がもっとも整備された時期で、A-2期以前の遺構を一部利用し、大規模な整地の後に計画的な造営をおこなっている。

発掘区の中央を縦断して北流する石組溝03を境にして、東部には長大な建物で四方を囲んだ区画がある。今回調査区の南端で桁行12間×梁間2間の東西棟建物を新たに検出した〔建物11〕。これが区画の北を限る建物で、区画の大きさは東西幅25m、南北長50mとなる。長方形区画の内部には正殿相当の四面廂付南北棟建物15（身舎の規模8間×3間）と前殿風の東西棟建物16（6間×2間）が配されている。

石組溝03は南正面にある井戸SE800に発するA-2期の石組溝02を廃して西へ付け替えたものであるが、この区画の西南隅を迂回するようにして北へ延びている。そして区画が閉じた今回調査区の中程で再び東へ折れ曲がり、もとのA-2期の溝02へと連結している状況が判明した。溝02の位置ではA-3期の建物群を建設できなかったために迂回させたのである。東側の南北棟建物12の東に沿って雨落溝09が走るが、これは建物11の東妻沿いからさらに北へ延びる。建物11と13の間には小規模な石組東西溝10がある。区画内から西の石組溝03へと排水する施設であろう。

主要建物規模一覧

時期	番号	種類	規模	桁行(m)	梁間(m)	底(m)
A-2	建物22	東西棟	9間×2間	2.0	2.1	
A-2	建物23	南北棟	3間以上×2間	2.0	2.1	
A-3	建物11	東西棟	12間×2間	2.1	2.1	
A-3	建物12	南北棟	18間×2間	2.1	2.1	
A-3	建物13	南北棟	18間×2間	2.1	2.1	
A-3	建物17	南北棟	45間×2間	2.5	2.5	
A-3	建物18	東西棟	6間以上×2間	2.5	2.5	
A-3	建物19	南北棟	5間×3間 四面廂付	2.5	1.8	2.0
B	建物32	南北棟	6間×2間	2.0	1.7	
B	建物33	南北棟	6間×2間	2.1	2.5	

石組溝03の西約5mのところ南北棟建物17がある。これは高さ30cmほどの基壇を有する梁間2間（5m）の廊のような建物である。石神遺跡の南辺を圍する大垣から41間分（101.5m）を確認し、東方の長方形区画を圍う外部施設ではないかと想定してきた。ところが今回、45間目で終わり1間分隔てて東西棟建物18へ違なことが判明したのである。前回調査で建物17の西に廂付の建物19の南半部を検出していたが、これは建物18の南3.5mで完結し、身舎5間の四面廂付南北棟建物となった。したがって、廊状建物で圍った南北長120mの区画が西に存在することが確定的である。なお南北棟建物17は、前回調査で焼失したことが確認されたが、今回も基壇付近で少ないながら焼土層を検出している。

建物17の基壇東西両縁にはもと石組の雨落溝20・21があったが、建物19の建設に際して壊し埋め立てられた。しかし、21は建物18の北側では壊されずに残り〔溝04〕約10m北流してから東に曲がり、東西石組溝05となってA-2期から存在する南北石組溝02へと直角に合流する。したがって、溝04Aと05はA-2期から存在していた可能性が強い。なお、石組溝04・05には底石があり側石を巨石一段で構成している点から開渠であったと考えられ、04には東の04Aからすぐ西の04Bへの付け替えがある。

A期に属する遺構としては、以上のほかに溝01より新しい斜行溝07、溝02の東に接する石組南北溝06と斜行する石組暗渠08がある。ともに過去の調査では見つかっていなかった遺構である。A期をさらに細分する必要があるかもしれない。

B期 火災による焼失を契機としてA期の遺構はすべて廃され、新たにB期の遺構が営まれた。整然としたA期とくらべ、B期の遺構は散在する傾向にある。

発掘区の東南隅で検出した南北塀30は、今回6間分を追加して計18間となった。調査区中央付近で西に折れ、東西塀31となる。14間分までを確認したが、以西はD期の遺構で破壊され不明である。調査区西南部で2棟の南北棟建物32・33を検出した。ともに前回その南妻をみついていたもので、桁行6間×梁間2間の規模と判明した。

C期 発掘区の西南に逆L字形に塀で囲んだ区画がある。南北塀34は第6次調査区南端から延びてくるもので、今回6間分を検出、計24間となった。西に折れて東西塀35となる。東西方向の素掘溝41も切り合い関係から当期に属するものとおもわれる。

B・C期においてもA期と同じく今回の調査区半ばで建物区画が一応の完結を見たことになる。

D期 D期の遺構には素掘り溝40・42と小規模な掘立柱建物43、および多数の土坑がある。いずれも埋土に炭片の混じるのが特徴。2条の溝は第3次調査区から北へ延びるもので、路面幅約10mの南北道路の両側溝と考えられてきた。溝40は今回もまっすぐ北へ延びるが、溝42は調査区中央でいったん西へ屈曲し、再び北流する。当初は素掘りであったが〔42A〕、砂礫層が堆積した段階で上に石組を溝築している〔42B〕。

D期の掘立柱塀で囲んだ区画は第7次調査区北端で閉じているが、この溝42の状況は塀の曲折に対応するものであり、D期においても区画がこのあたりで一応の完結を見ていると捉えられよう。

以上のほか、調査区の東端・北端で建物の一部を見つけたが[36~38]、規模・時期などは不明である。

遺物

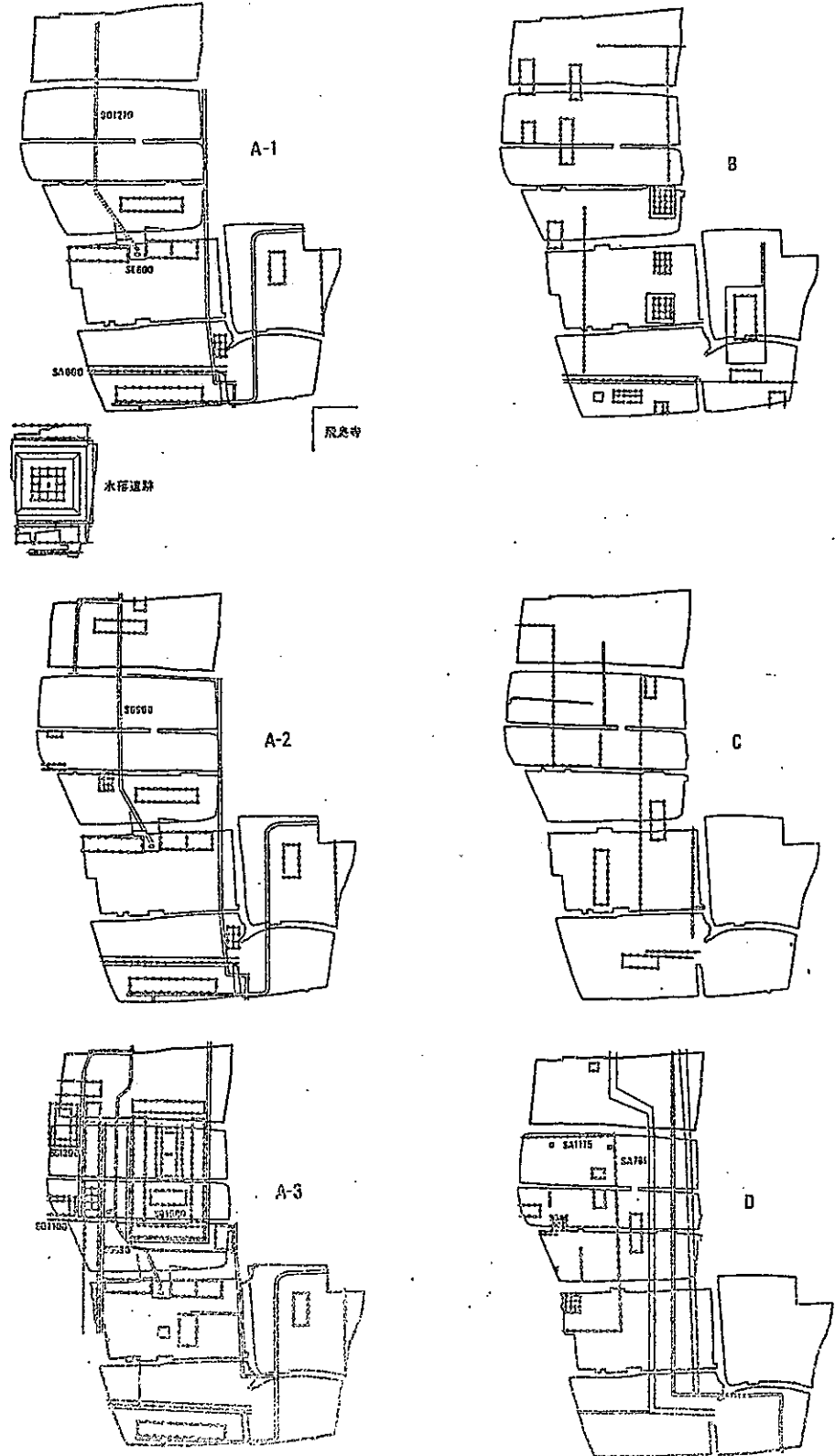
出土遺物には土器類、瓦類、金属製品、石製品などがある。最も多いのは土器類で、多量の須恵器・土師器・陶硯のほか少量ながら弥生土器・縄紋土器がある。瓦はきわめて少ない。金属製品では鎌、刀子、釘などの鉄製品がある。石製品には玉類(滑石製管玉など)、砥石、鏃、サヌカイトの剥片などがあるが、多くは縄紋~古墳時代の遺物である。

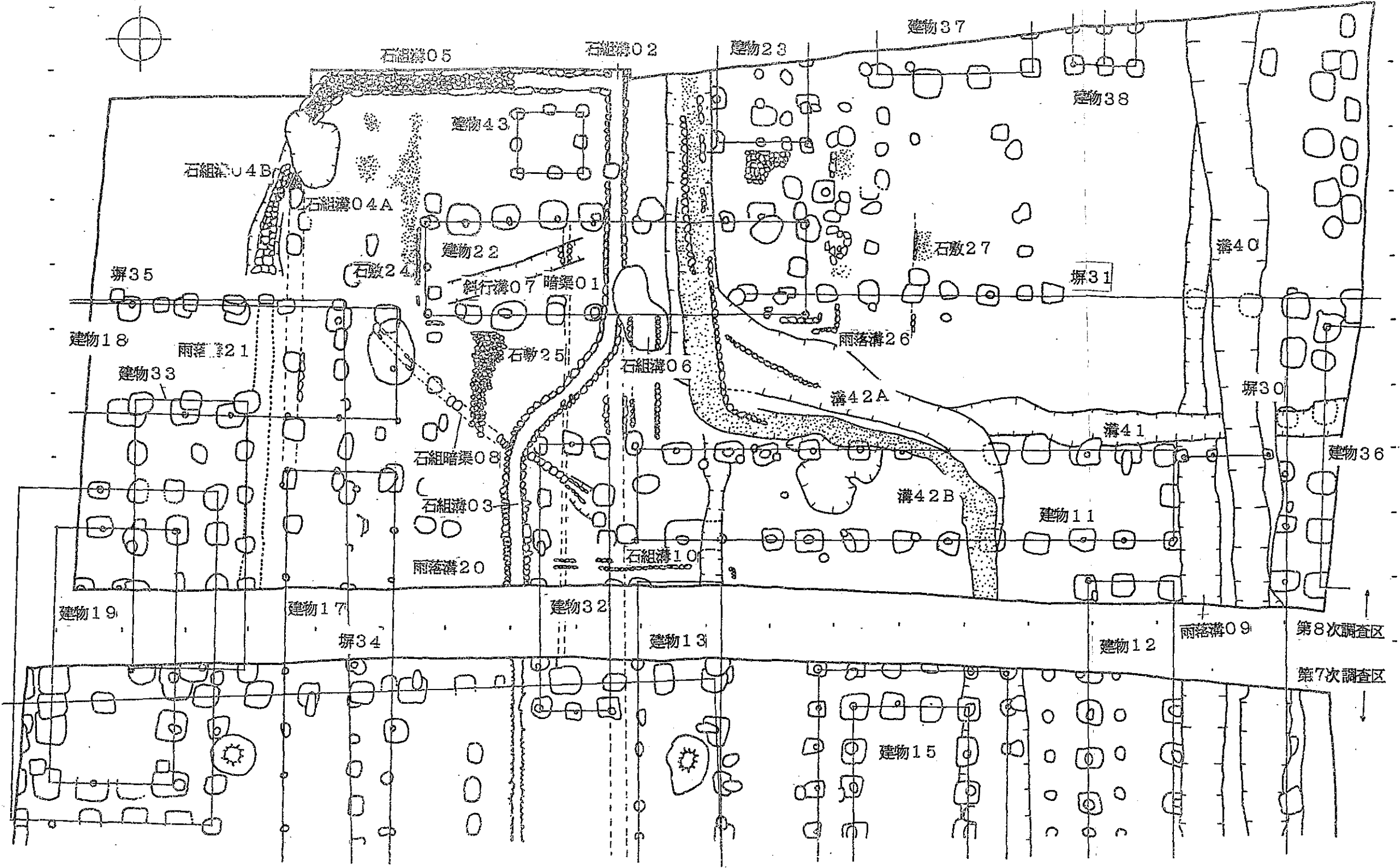
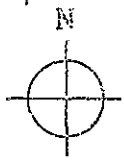
おわりに

従来の調査成果と今回の調査結果を総合すると、7世紀中葉を中心としたA期の実態がかなり明らかになった。すなわちA-1・2期には飛鳥寺の北に南面大垣を外郭とする一画が新設され、この中に建物や井戸、石組溝等が設けられる。この地が本格的に利用されはじめた段階である。A-3期には大改造がおこなわれる。西に南面大垣から南北120mにおよぶ廊状建物で囲んだ広大な区画を、また東には長大な建物で四方を囲した空間を設け、各々の内部に四面廂付の大規模な建物をはじめとする各種建物を整然と配置するのである。これらの建物群は屈曲する石組溝や石敷広場をともなっており、明治35年に発見された須弥山石や石人像の存在をあわせると、この地域が「斉明紀」に度々登場する饗宴の場にあたるという考えは妥当であろう。

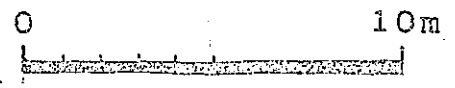
A~D期を通じて塀や建物で囲まれた区画がすべて今回調査区までで閉じていることが明らかになった。遺跡の北限については北方の調査を待たなければならないが、遺跡を理解する上で貴重な知見が得られたといえよう。また、A期に大きな区画が二つ東西に並存していることが始めて判明した。B期以降の遺構の解明も含め、西方における今後の調査の進展も期待される。

石神遺跡遺構変遷図





遺構区



第8次調査区

第7次調査区

- 石組溝05
- 石組溝02
- 建物23
- 建物37
- 建物38
- 石組溝04B
- 石組溝04A
- 建物43
- 石敷24
- 建物22
- 斜行溝07 暗渠01
- 石敷25
- 石組溝06
- 石敷27
- 溝31
- 溝40
- 溝35
- 建物18
- 雨落溝21
- 建物33
- 石敷26
- 雨落溝26
- 溝42A
- 溝40
- 溝30
- 石組暗渠08
- 石組溝03
- 雨落溝20
- 石組溝10
- 溝42B
- 建物11
- 建物36
- 建物19
- 建物17
- 建物32
- 溝41
- 溝30
- 建物13
- 建物12
- 雨落溝09
- 建物15
- 溝34
- 建物11
- 建物12
- 建物15
- 建物18
- 建物19
- 建物22
- 建物32
- 建物33
- 建物35
- 建物36
- 建物37
- 建物38